夢童

菅波　茂

パキスタン洪水被災者救援活動

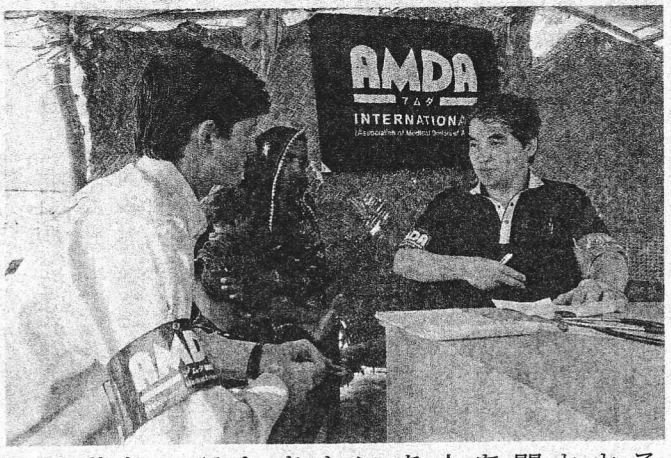
7月下旬にパキスタン北部で発生した洪水はインダス河に沿ってアラビア海に面するシンド州タッタ県にまで及び、3800人を超える死者と、1700万人を超える被災者がでている。パキスタンでは建国以来、最大規模の災害である。パキスタン政府は国際社会に救援要請をしている。

AMDAはパキスタンの2カ所に医療チームを派遣している。1カ所はペシャワール近郊で被災しているアフガニスタン難民に対して、隣国のアフガニスタンの首都カブールからアフガン支部医療チームを9月2日から9月末まで派遣。武装勢力により海外からの医師が殺されている危険な場所である。もう1カ所は南部シンド州タッタ県の被災地での巡回診療である。本部、インドネシア支部そしてバングラデッシュ支部から合計20人が参加している。

私はタッタ県での巡回診療に参加した＝写真。赤ちゃんからお年寄りまで年齢を問わず多くの被災者が受診した。当初予想していた下痢やマラリア患者はここでは少なかった。多かったのは胃の調子が悪い患者、あるいは呼吸器疾患だった。受診者が日本人に比べて15歳から20歳ぐらい老けてみえたのには驚いた。貧弱な食事、重労働そして厳しい環境が原因かもしれない。妊娠10回の女性もいた。

日本の平均寿命世界一に貢献したのは、国民保険法、保健所法そして母子保健法のもとに「相互扶助」に基づいた地域ぐるみの健康増進活動である。その果実として、日本人が常識としている衛生そして健康知識が健康増進の要因になると確信した。

AMDA多国籍医師団の現地での活動を支えてくれたのはNRSPというパキスタン全土に支部を持つ最大の団体である。北部ではペシャワール支部、南部ではタッタ県支部が宿舎、食事、輸送そして巡回診療の手配をしてくれた。12年前にAMDAはJICA（国際協力機構）と協力して岡山本部にて1カ月にわたる「ローカルNGOの能力形成プログラム」研修をアジア、アフリカそして中南米の各国から一団体のNGOを対象に3年間継続実施した。NRSPはその中の一団体で3年間参加者を派遣してきた。



研修に参加した彼らが現在ではNRSP内部で指導的地位に就いていた。その時の恩義のお返しである。国際社会の相互扶助の基本は義理である。義理とは個人と個人の関係でもある。個人は義理を忘れない。個人との義理を積み重ねることこそAMDAの緊急救援活動の迅速さの保証である。

帰国前に、カラチで70歳前後の最高裁判所の判事と会食をする機会があった。彼の言葉が印象的だった。「洪水の被災者たちは貧しい農民である。この被災者たちに今回最大の支援をしているのも貧しい人たちである。それに私は感動している。彼らは貧しいが、正直でよく働く人たちである。わが国の少数の富を持っている人たちが少しでも彼らに関心と支援をすればこの国はもっと良い国になると私は思っている」と。別れる時に彼にお願いした。「私の祖父も判事だった。あなたを見ると私の祖父を思い出す。今日もたくさんのことをあなたから学んだ。これからもあなたから多くの事を学びたい。機会があればまた会ってほしい」と。「喜んで」とのうれしい返事をもらって別れた。

今回のAMDAイスラム多国籍医師団派遣によるパキスタン洪水被災者救援活動を支援してくださっている皆様方に心からお礼を申し上げます。

（AMDAグループ代表）